中部学院大学・中部学院短期大学部　研究紀要第13号(2012) 115-121

研究ノート

小学校における「伝統的な言語文化」の指導研究
― 色彩表現を中心に ―

A Study of Teaching Traditional Language Culture in Elementary School
― Focus on Color Expressions ―

山　田　丈　美
Takemi　　YAMADA

2011 年度より、小学校では新学習指導要領にもとづく教育が完全実施されている。国語科における大きな改善点としては、「伝統的な言語文化」の指導の導入が挙げられる。学習者は小学校の児童であり、中学・高校で一般的に行われている文法や口語訳を中心とした古文・漢文の指導とは違う指導法が求められる。中学・高校に先駆けての古典との出会いを小学校でどのように設定するのか。いかなる方策をとることが児童の興味関心を喚起するのか。その鍵になるのは、現代とのつながりを意識させることであると考える。本研究では、その一つの観点として色彩に着目し、短歌・俳句の指導について検討した。

キーワード：言語文化　古典　色彩

1　本研究の目的

平成23年度より新学習指導要領（平成 20 年改訂）が完全実施されている。今回の改訂における要点の一つに、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が挙げられる。これについて、『小学校学習指導要領解説　国語編』では、以下のような解説がなされている。

> 伝統的な言語文化は，創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし，我が国の言語文化を継承し，新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している。例えば，低学年では昔話や神話・伝承など，中学年では易しい文語調の短歌や俳句，慣用句や故事成語，高学年では古文・漢文などを取り上げている。(1)

小学校段階から「伝統的な言語文化」に親しみ、「新たな創造へとつないでいくことができる」ようにするためには、指導にあたって、どのような工夫と手だてが必要であろうか。その指導法について検討することが本研究の目的である。

2　伝統的な言語文化に触れる接点としての色彩表現

子どもたちが「伝統的な言語文化」に親しみを持つためには、現代との接点を意識しながら興味関心を持てる方法を提示していく必要があると考える。

当時の人々にとっての重要な価値基盤でありながら、現代の私たちにとっても同様の価値や意味を見いだせるもの、その一つの観点として、本研究では色彩表現を取り上げることとする。色彩のように目に見えるものに対しては、児童もはっきりイメージしやすく、各自の見方・考え方を表明しやすい。また、お互いに比較し、共通点や相違点を見いだすなどの意見交流もしやすく、興味関心を持てるのではないかと考える。

『小学校学習指導要領解説　国語編』において、第３学年及び第４学年の「伝統的な言語文化に関する事項」では、「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」との記載がある。色彩は、「情景を思い浮かべ」る際の大きな鍵になると考える。色彩を伴った鮮やかなイメージが描けることで、暗唱や音読がより質の高いものへと導かれるのではなかろうか。

また、第５年及び第６年の「伝統的な言語文化に関する事項」では、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」との記述がある。「内容の大体」を知ることや、「昔の人のものの見方や感じ方を知ること」において、色彩を一つの柱とすることもできると考える。

甲斐睦朗（1993）は、中学校における「古典の享受」に中心を置く指導の具体化として、次のような方法・方向づけを提示している。

① イメージ化……各文章表現の内容をイメージとして明確にとらえるようにする。視覚的映像として描き出したり先人の心情を想像したりするのである。

② 朗読化……本文の情趣が表れるように音声的イメージを工夫する。

子ども学部子ども学科

③　内省化……人々の生き方や考え方などについて自分に結び付けてとらえる。そして、現代人の生き方などをとらえ直すよすがとする。
④　読書化……関連する作品や同じ作品の他の部分などを読み広げる。
⑤　語句の内在化……興味をもつ語句や当時の大切な語句についていろいろな角度から掘り下げて現代に生かすように試みる。
⑥　あらすじの表現……その作品のあらすじを、主題や人物の気持ちなどを配慮に入れてまとめる。

色彩表現は、以上の①～③に述べられている方法に関係している。すなわち、色彩表現は①の「視覚的映像」としてのイメージ化の重要な要素となり、②の「音声的イメージ」の構築にも繋がる。さらに本研究における現代との接点を意識しながら興味関心を持てる方法を提示していくという方向性は、③の自分や現代人との結び付きをとらえ直す際の指導の柱となり得る。小学校での「伝統的な言語文化」の指導では、中学校での古典指導以上に、甲斐（1993）の言う「イメージ化」「視覚的映像」が児童の興味関心を引き出すために重要になってくると考える。

3　短歌・俳句における色彩表現と色彩調査

これまで述べたように、色彩は、事物を認識したり、イメージを作り上げたりする際、大きな手がかりとなる。特に、限られた字数の中での言語表現である短歌や俳句では、イメージの構築に大きな役割を果たすことが多い。

実際に、小学校教科書教材における短歌・俳句に見られる色彩表現を幾つか挙げてみたい。便宜上、①～⑦の番号を付けることとする。

① 青がえるおのれもペンキぬりたてか　芥川龍之介
（東京書籍３年下）
② 赤とんぼ筑波に雲もなかりけり　正岡子規
（東京書籍３年下）
③ 春すぎて夏来にけらし白妙の
衣ほすてふ天の香具山　持統天皇
（東京書籍　４年下）

④ 田子の浦にうちいでて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ　山部赤人
（東京書籍　４年下　他）
⑤ 白葱のひかりの棒をいま刻む　黒田杏子
（東京書籍　５年上）
⑥ 赤とんぼ遊びつかれてさあかえろ　冨田真吾
（東京書籍　６年下）
⑦ 金色の小さき鳥の形して
いちょう散るなり夕日のおかに　与謝野晶子
（教育出版　４年上　他数社）

以上の俳句・短歌等について、資料１のように色の部分を空欄にして、各自想像して色を入れさせるという事前学習プリントを作成した。

（資料 1）俳句・短歌における色彩に関する調査

◇次の1～8の（　）に色を入れてください。また、その色を選ぶ決め手となったことばを下に書いてください。

		決め手となったことば
1	（　　）がえるおのれもペンキぬりたてか	芥川龍之介
2	（　　）とんぼ筑波に雲もなかりけり	正岡子規
3	春すぎて夏来にけらし（　　）妙の衣ほすてふ天の香具山	持統天皇
4	田子の浦にうちいでて見れば（　　）妙の富士の高嶺に雪は降りつつ	山部赤人
5	（　　）葱のひかりの棒をいま刻む	黒田杏子
6	（　　）とんぼ遊びつかれてさあかえろ	冨田真吾
7	（　　）色の小さき鳥の形して いちょう散るなり夕日のおかに	与謝野晶子

資料１の括弧の中に入ると思われる色を尋ねる色彩調査を、本学子ども学科２年生小学校実習指導受講者27名を対象に行った。小学校教諭免許状を取得して本学科を卒業し教壇に立っている１期生は、既に新学習指導要領にもとづき、国語科における「伝統的な言語文化」の指導を現場で行っている。彼ら彼女らのような新任教員のみならず、小学校の現場からは、その指導について戸惑う声が聞かれる。数年後に現場に立つ可能性のある本学小学校教員免許状取得予定の学生に、その指導の糸口となり得る色彩に関する調査を体験させたいと考え実施することとした。結果は以下の通りであった。

◇資料１に関する色彩調査の結果
実施日：2011年４月５日　（火）
対象：小学校実習指導受講者27名
質問項目：次の１～７の（　）に色を入れてください。また、その色を選ぶ決め手となったことばを下に書いてください。

資料１の短歌・俳句における穴埋め式の色彩調査〈表１〉を行う一方、そこに登場する生物や事物から連想する色を自由に回答する調査（資料２）を行った。

（資料２）連想する色についての調査

◇次のものから思いうかぶ色をあげてください。

1　かえる……〔　　〕色

2　とんぼ……〔　　〕色

3　布（ぬの）……〔　　〕色

4　葱（ねぎ）……〔　　〕色

5　いちょう……〔　　〕色

〈表１〉資料１に関する調査結果

番号	投入箇所	色(人数)	決め手となったことば
1	（　　）がえる	青（12）	かえる(7)
		緑（8）	かえる(8)
		赤（3）	
		白（2）	ペンキ(1)
2	（　　）とんぼ	赤（25）	とんぼ(22)
		青（1）	
		オレンジ（1）	とんぼ(1)
3	（　　）妙	白（13）	衣(3)
		緑（3）	夏(2)・山(1)
		黄（3）	
		青（1）	夏(1)
		水（1）	夏(1)
4	（　　）妙	白（19）	雪(13)
		緑（1）	田子(1)
		青（1）	富士(1)
		紅（1）	雪(1)
5	（　　)葱	青（14）	葱(10)
		白（12）	葱(6)・ひかり(4)・ひかりの棒(1)
		黄緑（1）	葱(1)
6	（　　）とんぼ	赤（27）	とんぼ(18)・さあかえろ(1)
7	（　　）　色の小さき鳥の形	黄（13）	いちょう(9)
		金（6）	いちょう(5)・夕日(1)
		赤（3）	夕日(1)
		緑（1）	鳥(1)

※6では、「決め手となったことば」に、「夕方(2)」「夕日(2)」「夕焼け(1)」「夕ぐれ(1)」等の俳句にないことばの記載があった。

資料１においては、まず「決め手となったことば」を中心に絵画的イメージを広げ、色を選択することになる。さらに俳句・短歌中の他の語句との関係から、色が選定される。俳句・短歌は字数が少なく、文字情報が少ない中で括弧に入るべき色彩語句を探り当てることが必要になる。また、日本の伝統的な言語文化には、五七調や七五調といった字数や言葉のリズムを意識した定型的な表現が多く見られる。伝統的な言語文化としての俳句・短歌の特徴をふまえ、資料１では、色彩感覚とともに、字数を意識して言葉を選択する言語力も必要になる。

一方、資料２においては、物から思い浮かぶ色を自由に挙げるため、これまでの生活経験や想像力が大きく影響する。「かえる」「とんぼ」「葱」「いちょう」については、それまでの生活経験における色彩認識が影響すると思われる。「布」については、油絵のキャンバスに最初に何色を塗るかにも似た、個人の色彩センスや想像力が影響すると思われる。

資料２について、資料１と同様に、本学子ども学科の学生 27 名（小学校教諭免許希望の学生）に調査を実施した。結果は、以下のようであった。

◇資料２に関する色彩調査の結果
実施日：2011年４月12日　（火）
対象：小学校実習指導受講者27名
質問項目：次のものから思いうかぶ色をあげてください。

〈表２〉資料２に関する色彩調査の結果

番号	言葉	色	人数	総数
1	かえる	緑	25	27
		青	2	
2	とんぼ	赤	26	27
		青	1	
3	布(ぬの)	白	16	27
		茶	4	
		赤	3	
		青	1	
		紺	1	
		黒	1	
		黄土	1	
4	葱(ねぎ)	緑	11	27
		白	9	
		青	5	
		黄緑	2	
5	いちょう	黄	27	27

４　二つの色彩調査に関する考察

資料１の調査においては、色彩感覚とともに、字数を意識して言葉を選択する言語力も必要になると述べた。一方、資料２では、これまでの生活経験や想像力が大きく影響すると考える。現代人の生活経験や自分自身の想像力の範囲で答えられる資料２の場合と、古文・擬古文における言語的、文学的な特徴をふまえた上での色彩認識が必要とされる資料１の場合とでは、おのずと回答に差が出る場合がある。その共通点や相違点を意識して指導を行うことで、児童の興味・関心を喚起できるのではないかと考える。いわば、色彩が現代と古文・擬古文の世界を繋ぐ接点となるのである。児童は、生活経験やそこからくる色彩感覚と、古人の色彩感覚や表現方法を比較しながら、共通点や相違点を実感することができるのではないか。両者をかけ離れたものとして扱うのではなく、同じ土俵に引き上げていくことが、小学校における「伝統的な言語文化」の指導を魅力あるものにしていくことに繋がる。

以下、資料１の調査と資料２の調査の結果を見比べながらさらに検討を加えていくこととする。

〔資料１と資料２についての検討〕

１ かえる　～青・緑～

表２より、「かえる」の色彩イメージとしては、圧倒的に「緑」という回答が多い。しかし、表１に見られるように、芥川龍之介の俳句中の「かえる」としては、「青」が１位になっているのである。一体、現代の私たちが持つ「緑」と「青」の認識には、どのような違いがあるのであろうか。

吉田則夫（1980）は、幼児言語の語彙、特に色彩語に関する論述の中で、「青と緑」について以下のような例を挙げている。

> 大人は、無意識のうちに青と緑との交替を行っているが、幼児にとって、その使い分けはかなり複雑な様相を呈しているようである。(事例省略)
>
> １歳11カ月では緑をアオと言い、２歳３カ月では、青をいったんはミドリと言い、すぐにアオと言い換えている。そして２歳11カ月では、交通信号の「アオ」という慣用的な呼称にも疑問をさしはさんで、ミドリと主張している。ここには、色の概念が明確に確立していく過程がみてとれる。もっとも、信号の緑色を「アオ」と呼ぶ慣用的な呼称を習得することは、それはそれで、さらに次の段階の語彙能力と考えるが、その前段階に、上のような明確な識別の段階があるものと思われる。予測をもって言えば、青と緑との慣用的な交替を言語習慣として獲得するのは、おそらく３歳以後のことであろう。[3]

吉田（1980）の論述に見られるように、私達日本人は信号の緑色を指して「青信号」というように、慣用的に緑と青の入れ替えをする場合が多い。また、両者の区別をあえてはっきりさせない場合もある。さらに、色名には、アオミドリというような中間的な言い方もある。幼児にとってこの使い分けを習得することは、難しいこ

とであろう。日常的な場面の経験を積み重ねていく中で身につけていくことになる。

しかし、青と緑の使い分けの問題は、今に始まったことではない。沖森紅美『色彩語の史的研究』(2010) では、中国からの文字輸入の時代までさかのぼって論じ、その混乱について、以下のように説明している。

> たとえば、「青」「緑」「碧」など青と緑の系統の語で言うと、確かに「あを」という語は歴史が古いものであるが、その色相は緑である。(中略)
>
> そこで、「あを」には広い概念と、狭い概念とがあるので、この二つを区別して、広い概念の方を「系統色名」のアヲ、狭い概念の方を「個別色名」のアヲと呼ぶことにする。[4]

沖森 (2010) の用語を使えば、本研究の資料１に対する回答（表 1）における「青」は「系統色名」であり、資料２に対する回答（表２）における「青」は「個別色名」といえる。資料１の１の俳句において、「緑」（ミドリ　３音）と回答したいところであっても、俳句の５・７・５の字数に収まらなくなる関係から、「青」（アオ　２音）の回答数が多くなり、１位になったと考えられる (資料 1)。すなわち、ここでは字数を考慮し、「系統色名」があえて使われているのである。「緑を青というから」との回答理由が記載されているものもあった。

また、この句の「ペンキ」という言葉遣いも、色を特定するにあたっては、重要なキーワードになる。薄い色、淡い色ではなく、人工的な濃い色がイメージされる。青や緑は、そのイメージに合致する。

さらに、「ペンキぬりたて」に見られる「～たて」という表現は、何かをして間もないことを表す。それが、「青臭い」「青二才」という場合の「青」の持つ「未熟な」「若い」というイメージと結び付くとしたら、「緑」ではなく、「青」でなくてはならなくなる。色にまつわる語句は数多くある。色名を中心に児童に国語辞典を引かせると、多くの発見があるであろう。

青と緑には、まさに伝統的な言語文化としての背景があり、現代との共通点や相違点を意識しながら、学習の興味づけとしていくことが出来るのではないかと考える。

2　とんぼ　～赤～

「とんぼ」の色彩イメージとしては、「赤」との回答 (26) 多く（資料２）、句に投入する色（資料１）の「赤」の回答数（25）とほぼ一致している（資料１の２・６）。６の俳句の色の決定の決め手には、「さあかえろ」を挙げた者が１名いる。また、６では「決め手となったことば」に、「夕方(2)」「夕日(2)」「夕焼け(1)」「夕ぐれ(1)」等の俳句にないことばの記載があった。「とんぼ」「さあかえろ」「夕日」「夕焼け」などの言葉のイメージが相まって、「赤」という色を印象づけたのではないかと考えられる。

沖森（2010）は、上代の「あか」の色相について、以下のように述べている。

> 上代語において、アカの色相は「あかごま」（赤駒）や「あかめ」（鯛の異称）などの例から見て、黄赤やピンク色など、明るい、赤みを帯びているものを広く指す。これは〈明るい〉を語源として内包することから、その意味の外延となる色相の範囲も広いのである。[5]

以上のような色名をもとにした関連性や派生語について知ることは、児童の興味・関心を引き出すのではないかと考える。「赤」－「明るい」の他、「赤とんぼ」から「アキアカネ」「アカネトンボ」などのとんぼの名に行き着くこともある。小学生用の国語辞典を見ると、「赤とんぼ」について、以下のような説明がなされている。

> あかとんぼ【赤とんぼ】意味　赤色･黄色･だいだい色をした何種類かのトンボのこと。夏から秋にかけて群れて飛ぶ。アキアカネ･アカネトンボなど。[6]

「あかね」について、沖森（2010）は、以下のような解説をしている。

> 「あかね」は染料の名であって黄赤であるが、これが枕詞「あかねさし」「あかねさす」では、赤く照り映える意を背景としていることから、平安時代には色名として意識されることもあった。[7]

以上の解説は、現代の「あか」「あかね」の認識との共通点を示唆するものである。さらに、音楽における唱歌とのかかわり（「とんぼのめがね」「赤とんぼ」など）や、理科における「季節と生物」の単元における学習内容と結び付けるなど、合科的な指導も考えられるであろう。

3　布（ぬの）　～白～

短歌の「妙（たえ）」では色を質問する場合に分かりにくいため、「布（ぬの）」として尋ねた。「布」の色彩イメージとしては「白」が第１位であるが、その他思い思いの色を回答している（資料２）。資料１の３の短歌では、「衣」と「白」との関連を決め手として回答しているようである。一方、「夏」をイメージして寒色系の色を回答した者もいる。４の短歌では、「雪」との関連から「白」を回答している者が多い。短歌を「知っていた」との回答も見られた。

伊原昭『古典文学における色彩』(1979) においては、白に関して以下のような解説がなされている。

> 白に対して、上代の人々は、種々の心理的なものを抱いていたことが知られる。衣服令には、「九服色。白。黄丹。紫。……」（令義解六－二一五頁）とあって、服色として最上位にあり、また、「白色乃聖朝重光照臨之符」（続日本紀二十九－三五五頁）のようにも記され、尊貴の念を抱いていたことが知られる。そして、白色には神秘の情を感じていたようで、（中略）白色のものが神性を発揮していることが数多く記載されており、当時の人々が白色に霊

的な念を持っていたことが明らかに知られる。[8]

以上のような白に対する神聖な感覚は、現代にも通じるものがある。結婚式や告別式などの儀式における服装では、白は黒とともに多く用いられる。また、清潔なイメージの代表色ともいえ、洗剤等のコマーシャルでは洗濯物の白が強調される。そのような色彩感覚においては、現代と当時とは大いに共通点があるといえよう。それを土台にした作品理解が小学生にもできるのではないかと考える。

4 葱（ねぎ）　～緑・白・青～

資料２に関する色彩調査の結果、「葱」のイメージとしては、「緑」と「白」との回答が多いが、「青」との回答もやや多い（表２）。「１　かえる」について述べたように、現代でも信号等で見られるように、「緑」を「青」と表現することが多い。「青ねぎ」との名称は一般的である。俳句では、字数の関係から「青」と「白」にほぼ二分された（表１）。「葱」とともに「ひかり」「ひかりの棒」の語句に注目すると、「白」のイメージが特定できる。すなわち、資料１の調査においては、俳句・短歌中の他の語句との関係から、選択される色が限定されるのである。それに気づく言語感覚や言語意識を持たせたい。

光と色彩の関係について、沖森（2010）は、以下のように先行文献の整理をしている。

> 佐竹昭広「古代日本語における色名の性格」（一九五五）は、古代語の色彩語彙について本格的に論じた最初のもので、古代日本語における「赤」「黒」「白」「青」の語は色彩を表すのではなく、「明（アカ）－暗（クロ）「顕（シロ）－漠（アヲ）」という光の二系列を表すものであり、その光の感覚から色彩語としてもちいられるようになったことを明らかにした。
>
> この佐竹論文を批判したのが、曽田文雄「日本語における色名の発生」（一九五七）である。曽田文雄は、上代文献において、赤・黒・白・青はいずれも光ではなく色彩を表していること、上代文献の色彩表現の中に光の系列を求めることは不可能であること、色彩配列は、色彩の施されていないシロと、これ以上彩色できないクロが両極にあり、その間にアカ・アヲがあって、光の度合いや色彩の濃淡によってさまざまな色彩語が生じると論じた。[9]

以上のように、古代からの色彩と光との関係について議論が交わされていることも興味深い。色名の由来にも様々な説がある。児童にそれを情報として与えるかどうかは別にして、教師が自身で知っておくことは、古典の解釈を豊かにする一助になると考える。

5 いちょう　～黄・金色～

資料２において、「いちょう」の色彩イメージとしては、全員が「黄」を挙げた（表２）。しかし、資料１の短歌７の括弧に入る色としては、「夕日」との関係で「金」や「赤」との回答が見られた。ただし、「金色」を「きんいろ」ではなく、「こんじき」との読みで回答したかどうかについては確認が必要である。

資料２の調査をものの色彩イメージ調査として見た場合、27 名の全員一致した「黄」との回答の下には、生活経験や常識があると思われる。しかし、その資料２の調査では色名として挙げられなかった金・赤・緑が、資料１の調査で出された。このことは、言語能力を養う上で重要である。すなわち、短歌における語相互の意味関係やイメージ上での影響を受け、括弧内の色が特定されたということになる。生活経験や常識のみでなく、語彙力や語を関連づける能力を養うことが、特に字数が限られている短歌・俳句のような「伝統的な言語文化」を読み解く場合には必要になってくる。

また、「伝統的な言語文化」という観点からの指導法として、「金色」を「きんいろ」と「こんじき」と読むことにおける違いを児童に考えさせるのも一つの方法である。これ以外に、「きんしょく」との読み方もある。広辞苑によると、それぞれ以下のような説明がなされている。

> きんいろ〔金色〕黄金のような色。こがねいろ。やまぶきいろ。こんじき。
>
> こんじき〔金色〕（呉音）黄金の色。こがねいろ。きんいろ。
>
> きんしょく〔金色〕黄金のようないろ。きんいろ。[10]

色彩としては、同じ色を指すのではあるが、表現から受ける印象が異なる。呉音は、古く中国から伝わった漢字音で、仏教用語に用いられた。「こんじき」と呉音で読む場合の代表として、岩手県平泉町の中尊寺の金色堂（こんじきどう）が挙げられよう。歴史的な建造物であり、そのような重みや風情が「こんじき」という読み方からも感じられる。金色堂のカラー写真や映像を児童に見せることも、「こんじき」の色彩を確認する手だてとなる。

一方、「金貨」「金魚」「金髪」のように、「きん」と読む場合には、現代の生活における事物を表す場合に使われることが多い。この３種類の読み方を古い年代順に並べると、「こんじき」→「きんしょく」→「きんいろ」となろう。与謝野晶子の短歌における「こんじき」という読み方は、短歌全体の擬古文的な表現（「小さき」「散るなり」）による。音読や暗唱を通して、このような言い回しにも徐々に慣れておきたいものである。

5　まとめ

本研究では、色彩を柱に、小学校における「伝統的な言語文化」の指導を検討した。

伊原昭『色彩と文芸美－古典における－』（1971）において、次のような記述がある。

> 『万葉集』では、色名の種類（約三〇種）も用例（七〇〇余例）もはなはだ豊富である。基本的な五色もそろい、主要な間色（紅・緑・紫）も多く、概念的に色彩を表現し得る、いわば高次の、文化的な段階にまで至った。そして、自由に様々の物象を色彩で表現し得る力もうまれ、やがてはこれが特に自然の風物の色彩を描く方向にむけられてゆく、といった和歌の世界の特質の萌芽もみることができる。また、僅かではあるが、同一色相の中の濃度（紅の深・浅等）という繊細な色覚の表現もみられるに至った。[11]

『万葉集』の時代に発展した色彩表現は、上代、中古、中世、近世、近代、現代へと受け継がれてきた。まさに「伝統的な言語文化」である。伊原（1971）の言う「基本的な五色」とは、赤・黄・青・黒・白である。時代を経て受け継がれ、現代と共通する色彩感覚・色彩表現もある一方で、現代の新しい色彩感覚も存在する。「伝統的な言語文化」についての小学校における指導は、現代に拠点を置きながら、古典の世界との共通点や相違点を探っていく方向が望ましいと考える。

伊原（1971）が和歌について触れたように、短歌・俳句で、情景を色彩感覚により捉えることは、現代人にも共通していることである。しかし、人工的な色彩感覚にならされた現代の日本人は、自然に対する色彩感覚がややもすると鈍りがちである。現代の小学生にも、色彩感覚を通して、「伝統的言語文化」を過去のものとして捉えるのではなく、現代に繋がる言語文化であることを認識させたい。本研究においては大学生 27 名を対象に色彩調査を行ったが、実際の小学生の色彩感覚とは異なることも考えられる。今後、児童を対象に調査し、その結果をもとに実際の指導研究をさらに具体的に進めていきたい。

その一つの方法として、児童に絵を描かせたり、さまざまな画材を使って色塗りをさせたりすることも有効な手だてになると考える。音読や暗唱などの聴覚的な刺激による指導とともに、絵画を取り入れるなどの視覚的な刺激に訴える指導も小学生にとっては重要である。イメージを豊かにし、それを絵に描くことによって可視化し、お互いに交流することができる。交流する際に、短歌や俳句の限られた字数の表現に今一度着目し、お互いの絵を講評させたい。

増淵恒吉（1981）は、「古典の散文を読解・鑑賞することによって、言葉の感覚が洗練されることは間違いないが、ことばの働きの微妙さを味わわせるのは、なんといっても俳諧や和歌の韻文においてである。」[12] と述べている。短歌や俳句により、小学校における「伝統的な言語文化」の指導の可能性をさらに検討していきたい。

〔引用文献〕

（1）文部科学省　『小学校学習指導要領解説　国語編』東洋館出版　2008 年　pp.7～8
（2）甲斐睦朗編『古典指導の方法－国語学習指導書別冊－』光村図書出版　1993 年
（3）吉田則夫「幼児言語の語彙：色彩語の場合」『国語教育研究　№.26 上』広島大学教育学部光葉会　1980 年　pp.465～472
（4）沖森紅美　『色彩語の史的研究』　おうふう　2010 年　p.30
（5）前掲書(4)、p.150
（6）甲斐睦朗監修　『小学新国語辞典　第 8 刷』光村教育図書　2005 年　p.16
（7）前掲書(4)、p.156
（8）伊原昭　『古典文学における色彩』　笠間書院　1979 年　pp.67～68
（9）前掲書(4)、pp.14～15
(10)『広辞苑　第五版』　岩波書店
(11) 伊原昭　『色彩と文芸美－古典における－』笠間書院　1971 年　p.4
(12) 増淵恒吉『増淵恒吉国語教育論集　上巻　古典教育論　』有精堂　1981 年　p.8